

2 頁 ～ 29 頁      第一章まるごと

3 1 頁 ～      第二章・第三章の濡れ場シーンサンプル

これまで何度手を振り払ってきただろう。親しい友人が励まそうとして肩に置いた手、恋人が愛おしげに繋ごうとした指先。そのたびに、相手は悲鳴を上げてその場に崩れ落ちた。

私に触れた者は、まるで雷に打たれたような激しい痛みと、体中の魔力を吸い取られるような虚脱感に襲われる。それが私にかけられた呪い——人を寄せ付けない体質だった。

「ごめんなさい、触れないで」

その言葉を何度口にしたか分からない。孤独を選び、誰とも関わらず、

ひっそりと生きる道を選んだ。……そのはずだった。

「——本当に、ここでいいんですか？」

目の前に立つ男が、不審げに眉をひそめて私を見下ろしている。シエアハウス「アルカディア」の管理会社が派遣してきた案内役の男だ。彼は私の顔を見て顔をしかめた。私の体質を聞かされ怯えているのだ。

「はい。人外専門のシエアハウスだと伺って」

「まあ、そうですが……。お嬢さん、人間でしょう？ 呪い持ちとはいえここで生活するのはリスクが高すぎますよ」

彼が指さす先にあるのは古びた洋館だった。

人外専門。魔導士、ヴァンパイア、人狼。人間とは違う理で生きる者たちなら、私の魔力なんて大したことはないかもしれない。いや、むしろ彼らにとっては私の触れた相手を廃人にする体質すら栄養源や実験材料になるかもしれない。

「それでも、ここしか私の体質を受け入れてくれる場所はなかったんです」  
私がうつむくと、男は大きくため息をついた。

「まあ、勝手ですがね。……彼らは人間に理解があるわけじゃない。殺さ

れないよう気をつけてください」

そう言い残して、男は逃げるように立ち去った。誰も私に触れない。そんな日々がこれからも続く。孤独なシェアハウス生活が始まるのだと、私は覚悟を決めて門扉に手をかける。

「おや、新しい住人の方ですか？」

背後から、穏やかで落ち着いた声が聞こえた。

振り返ると、そこにいたのは、さきほどの男とは比較にならないほど美しい男だった。夜空のような深い紺色の髪、知性を感じさせる眼鏡、そし

て洗練された仕立ての良いスーツ。魔法使い特有の、静かな魔力を漂わせている。

「あ……はい、本日入居予定の……」

「ふふ、お待ちしております。僕はアレンです。この館のリーダーのような役回りをしています」

彼は私を値踏みするような視線で見つめた。私は思わず身をすくめる。

「あ、危ないので近づかないでください！ 触れると、あなたも……」

「それは心配いりませんよ」

アレンは迷いなく歩み寄ると、私の手を掴んだ。

「っ!？」

私は目を見開いた。普通なら、彼は悲鳴を上げて崩れ落ち、電流のような痛みが彼を襲うはずだった。

けれど彼は平然としている。むしろ私の魔力を心地よさそうに受け入れていようだった。

「心地よい魔力だ……。人を寄せ付けない体質？ 違うね。君は魔力が多すぎて制御できないだけだ。僕たちなら、それを安全に処理できる」

冷たいはずの男の手が不思議と温かく感じられた。私の呪いが通じない相手。それだけで、涙が溢れそうになる。

「中で他のメンバーも紹介しましょう。……ようこそ、アルカディアへ」

アレンの手が、私の頬を優しく撫でる。初めての他人からのスキンシップ。身体が震えるのを、私は止めることができなかった。

アレンに導かれ、重厚な木製の扉をくぐると、外見からは想像もつかないほど豪華で近代的なロビーが広がっていた。床には肉厚な絨毯が敷き詰められ、壁には美しい絵画が飾られている。



「ここがリビングです。他のメンバーもすぐに戻ってくるはずですが……」  
アレンが言葉を切りかけたその時、リビングの奥から不機嫌そうな声が響いた。

「おいアレン、また面倒な人間を連れ込んだのか？」

ソファで横になっていた男が起き上がる。アレンとは対照的な燃えるような赤い髪に、血のように赤い瞳。端正な顔立ちは傲慢さを隠そうともしていない。

彼は立ち上がると、長い脚で音もなく近づいてきた。そして、逃げる間

もなく私の顎を掴み、その赤い瞳で覗き込む。

「……ふーん。こいつが、触れた相手を廃人にするっていう呪い持ち？  
どう見てもただの人間だけど」

「シアン、彼女は……」

アレンがたしなめるより早く、シアンは私の首筋に鼻を寄せた。

「人間の薄っぺらい精気じゃない。……濃厚な魔力の匂いだ」

そう言うと、シアンは私の首筋に迷いなく噛みついた。

「きゃああっ!？」

私は悲鳴を上げて彼を突き飛ばそうとした。私の体質が発動すれば、彼は激痛に苦しむはずだ。けれど、シアンは平気な顔で私の血を吸い続け、むしろ私を拘束する力を強めた。

「な、なんで……痛くないの？」

「痛いわけがないだろう。俺の牙はどんな呪いも貫く」

シアンは唇についた私の血を舐めると、妖艶に笑った。

「いいぞ、アレン。こいつは使える。俺の飢えを満たしてくれる」

顎を掴む力が強くなる。私は恐怖よりも彼の冷たい唇が首筋に触れてい

るその感覚に、身体が熱くなるのを感じていた。

孤独な日々では考えられない濃厚なスキンシップ。私の体質が彼らの媚薬になっているというアレンの言葉が現実味を帯びていく。

「さあ、レイも挨拶して」

いつの間にか、別の男がリビングの入口に立っていた。銀髪に、獣のような鋭い瞳。人狼のレイだ。彼はシアンを威嚇するように睨みつけている。

そして彼は私の前まで歩み寄り、シアンとはまた違う荒々しきで私を抱きしめた。強引に胸に押し付けられ、彼の獣のような匂いが鼻を突く。

「っ……あ……」

アレンは平気だった。シアンは血を吸った。そしてレイは、私を抱きしめているのに、苦しむ様子がない。

むしろ心地よさそうに私の身体に自分の魔力を馴染ませようとしている。

「安心しろ。俺が、その呪いを全部食ってやる」

レイは私の耳元でそう囁くと、私の首筋に自分のマーキングをするように、強く噛み跡を残した。一人に触れられるだけで限界だったのに、この家では、それが当たり前のように行われる。

私は、自分が孤独という檻から、彼らの濃厚な愛という、もっと甘くて逃れられない檻に入ってしまったことに気づくしかなかった。

「……さて」

アレンが眼鏡を拭きながら、冷徹な笑みを浮かべた。

「魔力を安定させましょうか。……今夜は誰から始めます？」

アレンの言葉の意図が理解できず、私は戸惑いを隠せなかった。

「あの……魔力の安定って、具体的にどういうことですか？ それと……」

この館に、住人はこの三人だけなんですか？ 他に女性は……」

私の問いかけに、アレンは眼鏡の奥の瞳を細めて優しく微笑んだ。その笑顔は、知識をひけらかす教授のようであり、獲物を狙う狩人のようにも見えた。

「いい質問です。まず安定についてですが……君の身体は今、本来持っている魔力の器を、呪いのせいで破壊しながらエネルギーを垂れ流している状態なんです」

アレンは私の手を取り、指先で手のひらをなぞった。それだけで、電流のような熱が走る。

「私の魔法でそのエネルギーの循環を整え、シアンの血で強度を高め、レイの魔力でその器を強化する。……そうしなければ、君の身体は魔力の過負荷で、いずれ自壊してしまう」

「……自壊？」

シアンがニヤリと笑い、私の肩に腕を回した。

「つまり、俺たちに毎日触れられていないと、お前は死ぬってことだ。怖えだろ？」

その言葉に恐怖で背筋が凍るが、彼らに触れられている安心感がそれを



上  
回  
る。

「それから女性の件ですが」

アレンは少し苦笑した。

「残念ながら、この館の住人で君のような呪い持ちはあなただけ。あとは

僕たちしかいません」

レイが私の顎を持ち上げ強い瞳で覗き込んだ。

「俺たちが責任を持ってその身体を満たしてやる」

「身体を満たす……？」

私が怪訝に問い返すと、アレンは決定的な口調で告げた。

「ええ。この館の『ルール』です。私たちの魔力を維持するため、君の自壊を防ぐため、毎日肌を重ねてエネルギーを交換しなければならない」

「……はい？」

「まあ、座れよ」

シアンが私を強引にソファへ座らせ、彼はその隣に腰を下ろして、私の膝の上に脚を絡めてきた。私が言葉を詰まらせると、レイが私の後ろから覆いかぶさるようにして、その大きな腕で私を拘束した。獣のような熱い

吐息が耳元にかかる。

「準備なんていらぬ。お前はただ俺たちにその身体を預けていればいい」  
レイの言葉には逃げ場を塞ぐ絶対的な支配の響きがあった。彼らの魔力に、文字通り身体を塗りつぶされる。

このままでは、私は「私」ではなくなってしまう。彼らの魔力に支配され、彼らに食いつくされるだけの肉塊になってしまう。

「……っ、帰ります」

私はシアンの脚をどかしてレイの拘束を振り切ってソファから立ち上が

った。

心臓が早鐘のように打つ。私の魔力がパニックで暴れそうになり、周囲の空気がビリビリと震える。

「ここには……いられません。帰らせてください！」

逃げようとする私に、三人は特に驚く様子も見せず、ただ静かに見つめていた。その瞳には、私の逃亡など最初から見透かしているような、冷やかな余裕があった。

「帰る、か」

シアンが退屈そうに呟く。

「お嬢さん、分かってないな。外の世界はもう君には危険すぎる」

「危険？」

「ああ。俺たちと触れ合って君の体質は変わった。今の君がそこら辺の間と触れ合ったら、その男の魔力だけでなく、魂まで吸い尽くして廃人にするだろうね。……殺人鬼として警察に追われないなら、止めはしないが」

殺人鬼。その言葉に私は息を呑んだ。アレも穏やかな声で追い打ちをかける。

「それに、毎日魔力を循環させないと、君の身体はすぐに自壊し始める。  
……ここから一步でも出れば、君は数日もしないうちに、激痛の中で死ぬ  
ことになるよ」

逃げられない。帰る場所なんて、どこにもないのだ。

私がある場に崩れ落ちそうになった時、レイが素早く私を受け止め、その腕の中に抱きしめた。

「大人しくしていればいい。俺たちがお前を壊しはしない」

レイの言葉は愛のささやきというより、絶対的な宣告だった。

私はレイの胸の中で、ただ涙を流すことしかできなかった。膝から崩れ落ちた私を、レイがその強固な腕で抱き上げる。恐怖と絶望、そして彼の体温からくる甘い安心感が混ざり合い、思考が定まらない。

「どうすれば……いいんですか。私はもう人には戻れないの……？」

か細い声で問いかけると、アレンがしゃがみ込み、私の目線に合わせて眼鏡の奥の瞳を覗き込んできた。

「人間に戻る必要はない。これからは、私たちのモノとして生きればいい。……そうすれば、激痛に苦しむことも、誰かを殺めてしまう恐怖に怯える

こともない」

アレンの手が、私の頬に残る涙を優しく拭う。

「安心しなさい。その代わり……私たちのモノとして、毎日愛してあげる」

アレンが唇を近づけ、私の唇にソフトにキスをした。けれどそれは、ただの愛情表現ではない。彼が私に呪いの制御術式を刻み込むための、魔力的な契約の印だった。

甘い痺れが全身を駆け抜ける。逃げ出そうとしていた身体が、急速に力を失い、心地よい倦怠感に包まれていく。



「おいアレン、俺の番を邪魔するなよ」

シアンが退屈そうに立ち上がると、私の髪を弄びながら赤い瞳を妖しく光らせた。

「お嬢さん、いい覚悟をしたな？ さあ、寝室へ行こう。……今夜は眠らせないかもしれないが、死ぬよりはマシだろ？」

シアンは私をアレンの腕から奪い取ると、軽々と姫抱きにした。

「な、寝室……っ」

私は抵抗しようとしたが身体が魔法で動かなくなっていることに気づく。

「暴れるな。壊したいわけじゃない、満たしたいんだ」

シアンの腕の中で、私は必死に身体をよじった。

このまま連れ去られたら、もう二度と元には戻れない。恐怖がパニックとなり、私の呪いが暴走し、周囲の家具がビリビリと震えだす。

「だめ！お願い、降ろしてっ！」

「……うるさいな」

シアンは忌々しげに舌打ちをすると、通路の壁に私を押し付けた。逃げられないように身体を完全に封じ込められる。

彼が懐から取り出したのは、小さなガラスの小瓶だった。中には、どろりとした妖しく輝く紫色の液体が入っている。

「ひっ……な、なに、それ……」

「これを飲めば、お前の無駄な抵抗心は消え失せる。……まあ、暴れるエネルギーが快楽に変わるだけだがな」

シアンは私の頬を強く掴み、無理やり口を開かせた。

「んっ……！」

瓶の口が口内に押し込まれ、甘く、同時に脳を麻痺させるような濃密な

液体が喉の奥へ流し込まれる。

液体が食道を伝って胃に落ちた瞬間、全身の血管が爆発したかのような激しい熱が走った。

「はあっ、はあっ……っ！」

パニックで動いていた心臓が、別の理由で早鐘を打ち始める。思考が霧の中に沈んでいく。

「な……なにこれ……身体が、すごく……っ♡」

抗おうとしていた力が嘘のように抜け、シアンの指が触れるだけでゾク

ゾクとした快感が背筋を駆け抜ける。

「いい顔になった。……恐怖が甘い欲望に変わる瞬間は最高だ」

シアンは妖しく微笑むと、再び私を抱き上げ寝室の扉を開けた。

私の身体はもう、意志とは無関係に彼を求め快楽を求めて熱くうねり始めていた。



「……見ろよ」

シアンは私の脚の間に顔を埋めたまま、見上げるような視線で私を見つめた。その赤い瞳は、妖しく、そして激しい欲望に濁っている。

「……っ、な、なにを……」

私が息も絶え絶えに尋ねると、シアンはベッドのシートから上半身を起こした。彼の手には、私の愛液と彼の唾液で濡れた跡がはつきりと残っている。

そして、私の手首を縛っていたリボンを、片手で鮮やかに解いた。

「……可愛い反応を見ているだけで、こんなになってしまった」

シアンは私の手を掴むと、自分の熱く硬くなった下半身へと導いた。ズボンの上からでも分かる、その凶暴な熱さに私は息を吞む。

「俺を責任取って満たせ。……お前のカラダで、飢えを燃え上がらせてみる」

シアンはそう囁くと、私を押し倒し、そのまま強引に自分のものにしてきた。

「いや……っ、これ以上は……っ！」



私は最後の一踏ん張りでシアンの肩を押し返そうとした。けれど、彼がその紅い瞳で私をじっと見つめた瞬間、言葉が途切れる。

「……抵抗するのか？こんなに濡れているのに」

シアンが低く甘い声で囁きながら、私の腰を強く引き寄せる。彼と目が合ったまま、私の頭はぼーっと白く染まり、シアンの魔力に完全に支配されていくのを感じた。

「あ……、ああ……」

拒絶したはずの口から漏れたのは、蕩けたような吐息と、彼を求める懇

願の声だった。抵抗なんて、最初から私にはできないことだったのだ。

彼の瞳に魅了され、思考が白く蕩けていく中で、彼が何を言ったのか、

その言葉の意図を理解するのに少し時間がかかった。けれど、彼が私の腰から手を離し、何かを手を持った気配がして、意識が少しだけ現実に戻る。

「さあ、これを舐めてもらおうか」

彼の指先には、先ほど飲まされた媚薬よりも、さらに色が濃く、怪しく

紫に輝く液体が入った小瓶があった。ただの媚薬ではない。これは私の魔力を強制的に引き出し、彼への欲望を極限まで増幅させるための「催淫魔

薬」だった。

「っ……あ、そんなの……っ、私はもう……っ」

ぼーっとした頭のまま、かろうじて抵抗の言葉を口にする。けれど、シアは私の頬を逃げられないほどの力で固定し、小瓶の口を私の唇に押し当てた。

「これ以上、我慢する必要はない。お前はただ、俺に愛されることだけに集中していればいいんだ」

シアンの紅い瞳がさらに妖しく光る。その魔力に当てられ再び私の意志

は呆気なく崩れ去った。私は拒むことを止め、小瓶の口を咥えてしまった。どろりとした、甘く狂おしい液体が口内に流れ込んでくる。媚薬とは比べ物にならない強烈な熱波が、喉から胃へと落ち、そこから全身の血管を駆け巡った。熱い。全身が彼の熱を求めて叫んでいる。

「……んっ、あ……！あつい……！♡」

空になった小瓶をシアンが放り投げると、私はベッドの上で痙攣しながら自らの意志では抑えきれない欲望に身をよじった。肌の隅々までが敏感になり、空気の震えすら快感に変わる。シアンの姿を見るだけで、体中か

ら甘い愛液が溢れ出して止まらない。

「ははっ、いいぞ。お前の全部が俺の魔力で染まっていく」

シアンは私の反応を見て満足げに笑うと、私の髪を掻き上げ、耳元で熱い吐息を吐きかけた。その吐息だけで、私は絶頂の淵に突き落とされた。

私はシアンの背中に爪を立て、ただ快樂の奴隷として、彼にすべてを捧げる覚悟を決めるしかない。

催淫魔薬の熱波に脳の全てを焼き尽くされ、私はただ、シアンという熱い支配に浸るだけの生き物になっていた。理性が完全に霧散した今、頭の

中にあるのは、ただ彼を求めたいという本能的な欲求だけ。

「……シアン、もっと気持ちよくして♡♡」

私は狂おしい表情で彼を見上げ、自分からシアンの腰へと這い寄った。

彼の硬く熱いモノが、私の目の前にある。それが何なのか理性的な理解なんて必要なかった。ただそれを口にすれば、この限界まで張り詰めた熱さが癒やされるということだけが分かっていた。

シアンは挑発するように、眉を上げてニヤリと笑った。

「……いいだろう。お前のその『呪い』、全部俺に飲ませてみる」



「もっと♡もっと突いてえ♡」

シアンは私の懇願に、邪悪で妖艶な笑みを浮かべた。紅い瞳がギラギラと欲望に濁り、私を蹂躪する腰の動きがさらに激しさを増す。

ドシュツ！！ ドシユウウツ！！！！♡♡♡

限界まで張り詰めた内壁に、シアンの熱いモノが容赦なく奥深くまで突き刺さる。そのたびに、全身に電撃のような快感が駆け抜け、私はベッドの上で弓なりに身をよじった。

彼と繋がっている場所から、濃厚な魔力が奔流となって流れ込み、思考



は完全に停止。ただ彼に蹂躪される喜びの限界を超え続け、至上の絶頂へと沈んでいく。

「ああんツ！！……っあ、そう、もつと、もつとオツ！！……っはああっ、おちんぽ気持ちいい、大好きえツ……♡♡」

私は彼にすべてを明け渡し、狂おしい愛の宴の中で、至上の快楽を貪り続けた。彼は私の内側で暴れ回り、私はそれを愛おしく感じながら、彼に支配される喜びの限界を超えようとしていた。

「……っあ、だめ、ああっ……！！……っ、いきそう、いきそうおッ

……♡♡」

限界まで張り詰めた私の身体は、シアンが突くたびに狂おしく跳ねる。

彼の濃厚な魔力と、容赦のないピストンによって、全身の媚薬がさらに燃え上がり、快感の頂点がすぐそこまで迫っていた。

ドスッ！　ズチュッ！　ヌチャ、ヌチャアアーッッ！！♡♡

「ああっ、だめえ、壊れちゃうッ！！♡♡♡」

部屋中に卑猥な濡れ音が絶え間なく響き渡る。

私は彼に抱きつき、その背中に爪を立て、脳髓が痺れるような絶頂の波

に耐えきれず、絶叫した。

「……ははッ、言わなくても分かってる。……俺の全てで、お前を最高に感じさせてやる」

ドスッ！　ズチュッ！　ドズ、ドズウウウツツ！！！！♡♡♡♡

シアンは私の蕩けきった声を聞きながら、さらに激しく、深く、私を蹂躪し続けた。

「あーっ！……あーっ！！♡♡♡」

シアンが深く、最も奥の場所を強烈に突き上げた瞬間、私の身体は限界

を超えた快楽に硬直した。

卑猥な音が部屋中に響き渡り、全身の血管を駆け巡っていた熱波が一気に脳髓へと吹き上がる。視界が真っ白に染まり、思考も理性も、抵抗する意志さえも、すべてが快楽の奔流に押し流されていく。

彼の濃厚な魔力が体内へと一気に流れ込み、私の『呪い』の体質と混ざり合って、脳を蕩けさせるほどの甘美な悦びをもたらす。

絶頂の瞬間、私の内壁が限界を超えて収縮し、シアンのモノをまるで捕らえて離さないかのようにきつく、激しく締め付けた。

そのあまりの強烈さに、シアンは荒い息を吐きながら目を見開いた。

「くっ……！……すごい締め付けた。お前、本当に……俺を壊す気か……っ！！」

彼は満足げに、そして苦しげに喉を鳴らし、私の腰を掴んでさらに深く容赦なく突き上げる。私の痙攣が収まらないまま、二人の体液と魔力が混ざり合い、部屋中に熱い吐息と卑猥な濡れ音が満ち溢れていた。身体が、さらなる魔力を求めて勝手に動き出した。

私は腰を上げ、自分からシアンのモノを奥へと深く、貪欲に突き入れる。



私の体内に熱い魔力をこれでもかと注ぎ込んだ後、レイは結合部からその極太のモノをゆっくりと引き抜こうとした。結合部が空気に触れ、濃厚な愛液と彼の魔力が混ざり合った白濁が、糸を引いて溢れ出る。

その瞬間、私は解放感と彼が去っていく空虚感に襲われ、身体がびくびく大きく痙攣した。

けれど、レイは完全に抜き切る直前で止まると、ニヤリと笑い、再びそのモノを限界までギチギチと、子宮の奥へと押し込んだ。

ドシユウウツッ！！！！♡♡♡

「んうううっ！？♡♡♡」

「逃げられると思うなよ。お前の発情まんこが、俺のモノを離したがらねえんだからな」

アレンもその淫らな光景を冷徹な瞳で見つめ、私の身体を抱きしめて新たな魔力を流れ込ませる。

私は彼に抱きつき、その背中に爪を立てて狂おしい快感に耐えながら、二人の男の欲望に完全に支配され、溺れ続けていた。

私の体内に濃厚な魔力を注ぎ込んだ後も、レイのピストン運動は止まる



ことを知らない。結合部から溢れ出た白濁がシーツに淫らなシミを作り、部屋中が濃厚な愛液と魔力の匂いに包まれていく。

結合部から引き抜いては深く差し込む挙動を激しく繰り返し、そのたびに私の敏感な場所が引き裂かれるような快感に襲われ、絶頂の余韻が冷めるどころか、新たな絶頂が塗り重ねられていく。

アレンは自身の誇り高いほどに大きく硬く成長したものをあらわにし、私の髪を掴んで引き寄せ、冷たいものを突きつけた。

「……あーあ、僕はまだ挿れてないんですからね？」



座位でのアレンの激しいピストンと乳首への責め立て、そして体内で混ざり合う二人の濃厚な魔力の熱波に、私の理性の糸が完全に焼き切れた。

視界が真っ白に染まり、全身の神経が焼き切れるような快樂が血管を駆け巡る。その瞬間、私の体から限界を超えた愛液が、暴力的なまでの勢いで噴き出した。

ぷしゃっ！ぷしゃあっ♡♡♡

部屋中に卑猥な濡れ音と、液体が飛び散る音が轟く。モノを締め付け、痙攣し続ける私の結合部から、二人の魔力が混ざり合った潮が止まること

なく嘔き出し続ける。

「最っ高……♡僕の魔力で、君が完全に壊れるまで汚してやる……ッ!!」

アレンは私の乳房をさらに激しく揉みしだきながら、狂ったように腰を突き上げ、至上の絶頂へと沈んでいった。

アレンの極太のモノが、座位の姿勢で私の奥の奥を容赦なく突く。

その激しい蹂躪に加え、後ろからレイが私の体を抱きしめ、両手で乳首をこれでもかと強引に揉みしだき、愛撫し始めた。

「……っふあッ、ああっ、ああっ!!……だめだめっ♡♡」

ドシユウウウツ！！！！　ぐちゆるるるるツ！！！！　ずぶううううう

っ！！！！♡♡♡

全身が痙攣し、限界を超えた快感が脳髓を焼き尽くしていく。

「……だめ……ッ！！　止まってええええッ♡♡♡……あ、あああつ、またイっちゃうよおおおッ♡♡♡」

レイが私の乳首をさらに強く引き伸ばし、アレンが腰の動きを獣のように激しくする。私の体は弓なりに反り返り、限界の快感に脳髓が文字通り蕩けていった。

「……っふあッ、ああっ、ああっ！！♡」

私の必死な懇願に、アレンは獰猛な笑みを浮かべ、座位のままピストンの速度をさらに上げる。結合部を深く突き回し、その衝撃が全身に響き渡るたび、私は快感の余韻で震える身体を彼にしがみつかせることしかできない。